〈研究ノート〉

宮古大神島「うふぷなかのあーく」

新 里 幸 昭

一、はじめに

これまで大神島の神歌の採集報告はなかった。筆者も何度か調査を試みたが、禁忌の扉に固く閉ざされて、それを開くことが出来なかった。宮古の民俗学を志して相談に来た学生にもこの島の研究がされていない現状を話し、ここの神歌研究をすることを勧めきたが、その採集には至っていない。

2017年１月27日大神自治会から『ウプシ　大神島生活誌』が刊行された。（以下『ウプシ』と略する）。これまで大神島とその名が示す通り、大きな（偉大なる）神の島、恐れ多い神の島、と、島全体が禁忌の扉に閉ざされていた。それが中から開かれたのである。

「大神は母親であり、その娘が島尻であり、その息子で弟が狩俣である」、と伝えられて来た。その伝承を解く鍵が、記載されているのではないかと密かに期待していた。「第５章 祭祀」にひとつの神歌「うふぷなかの歌（あーぐ）」が収められているが、訳が付けられていない。このアークに逐語訳を付けることと全体的な意味を把握することを本稿の目的にしたい（ウプシでは「あーぐ」と記載されているが、宮古の一般的な言い方であり、大神では「アーク」という）。

この神歌の名称は、うぷなか（大きな祭り）の中で謡われるアーク（歌謡）という意味である。大神島出身の伊佐照雄さん（1952年生）のお話によると、島では単にアークといい、男性が祭事で謡うのはこのアークひとつだけという。アークといえば、これに決まっていたので、祭事名を付ける必要もなかったようである。が、分かり良くするために本書では祭祀名を記しているようである。

2017年５月19日午後５時30分、伊佐さんのほか、伊佐さんをご紹介してくださった大神島出身の狩俣幸男さん（1940年生）や狩俣出身の仲宗根義夫さん（1943年生）に、私宅にお越しいただいた。

伊佐さんは、『ウプシ』の裏表紙を描かれた方で、島にお住まいの頃から、父親に連れられて祭祀に参加していたという。島を出られた後も度々この神行事に参加してアークを謡ってきたという。詞章の記述はもとより、譜面にとるなどされていた。当日そのファイルも準備され、私たち３人に提供してくださった。そのような優れたアークの伝承者である。ファイルには、このアークに対する伊佐さんの解釈と考察が記されている。

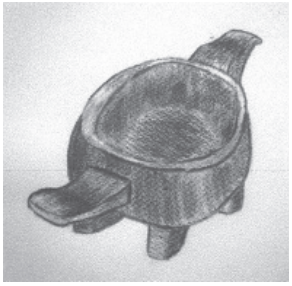
二、うふぷなかのあーく

この『ウプシ』の「第５章祭祀」の10月の「ウヤガン　ウプニガイゥ（ジューガツニ

カイゥ)」には、次のように、このアークの謡われる背景が説かれている。

一年の最後のウヤガン祭りとなる。内容はイタスニカイゥと同じだが、異なるのは神と離れる時にウヤガンがふるえだして走り出すことである。そのため、両腕を世話役の人達が逃がさないようにつかまえて、クパムトゥまで誘導する。クパムトゥまでくるとウヤガンは今までのふるえていたり、走っていた勢いがなくなり、カシ（仮死）状態になる。世話役の女性達が背負って、ツカサの家へつれていく。ウプヤーの庭の入口で卵より少し小さなお米の団子を男性がツノサラに持ってきて、タウトイといって、男性は戻り、ウヤガンもツカサの家に休ませる。その後でウプヤーの家の中で島全員でツヌサラの歴史の歌を歌う。

として、アークを紹介している。伊佐さんのお話を付記すると、ウプヤーは、屋号で、大きな家の意味である。プナカ（祭り）の時には、ムトゥヤー（元家）と特別に呼ばれる家のことである。プナカは、旧暦６月から10月にかけて５回行われるうやがン［ujagam］（祖神祭り）である。５月の１回目を、にかイ　ぱキみ　ぷなか［nikaɨ pakɨmi punaka］（願い始めの祭り）といい、７月・８月・９月の２回目・３回目・４回目を、にかイ　ぷなか［nikaɨ punaka］（願い祭り）といい、最後の５回目を、うふぷなか［uɸupunaka］（大きな祭り）という。また、７月には、２年に１回、いたシ　チキぬ　にがイ［itasɨ tsɨkɨnu nigaɨ］（出だす月の願い）があるという。このアークが謡われるのはウフプナカである。いずれも夕方、基本的に各戸成人男性１名がムトゥヤーに集まりアークを謡う。それをウプシの説明では「島全員」と表現している。それ以外に大野越しに移転して行った方や中学生の参加もあったようである。2015年には８名であり、それ以前で多い時には20名を超していたようである。アークは、アークを先導するプナカヌシ（祭りの主）１名が１節を謡いおえると、参加している他の男性が繰り返し１節を謡い、終える。そしてプナカヌシが２節を謡い、また他の男性が２節を繰り返し謡っていく形式をとる。ツノサラには神酒を盛らない。ウプシの説明どおりである、と、伊佐さんは話されていた。



左の図は、伊佐さんの描いてくれたツノサラである。方言では「ゆなうす（世直す）」というようである。１辺が12～15センチ、深さ10センチ、両方の取手（ツノ）が７センチ、４本の２センチほどの足が付いている。それは、お神酒だけでなく、おにぎり、ソーメン炒めや調理したキビナゴなどの料理を、神様にお供えして豊穣を祈願する時にも用いた容器である、という。その材料を求めて八重山に行って来た祖先の功績を讃えたアークが、このアークである。

まず『ウプシ』では、５節目を１節として扱っているが、詞章の長さから２節相当分の長さであるため、『ウプシ』の５節を５節と６節に分ける。分けた部分の謡い方も同じだという。伊佐さんもこの歌謡を文字化した書記（記録者）の単純な書き忘れではないか、そして100節ではなく101節ではないかと、指摘している。それに従って節番号を記す。

アークは、その逐語訳もついていない。表記も音声のとおりであるか、判断しがたかった。が、『ウプシ』記載のアークを参照しながら、伊佐さんに詞章を読んでもらい、それを表記した。その後で筆者の逐語訳を検討して、最後に譜面に従って一節だけ謡っていただいた。なお、歌謡の音声表記は、筆者が1978年以降用いてきた表記法を用いる。標準語にある音声は平仮名、中舌の音声［ɨ］段の音声は、片仮名を用いる。また［o］と［u］の中間的な音声［U］をオとし、その段も片仮名で表記した。『ウプシ』の「お」であったり、「う」であったりするのは、その中間的な音声の記述のゆれである、と推測される。そのほか慣用されている「てぃ」「とぅ」、「ヴぁ（va)」の無声化は「ウぁ」とした。このほか「神［kam］」の［m］は「ン」として、［n］［ŋ］は「ん」と区別した。

これまで大神島方言の報告では、濁音が少ないということであった。正にアークの歌詞にもその特徴がみられる。

うふぷなかぬあーく

1. にたてぃぴーノ　ぱずみぴーノ　みゅーぷき	根立て部の　始め部の　お蔭で
あしぱとぅ　ゆーまシ　＜以下省略＞	そうするのだから　世（豊穣）は増す
2. なかぴかン　うぷゆーぬシ　みゅーぷき	中辺の神　大世主　お蔭で
3. にぴノかン　たとぅくるか　みゅーぷき	威部の神　二所の　お蔭で
4. ンまてぃだぬ　うやてぃだノ　みゅーぷき	母太陽の　親太陽の　お蔭で
5. ももかンぬ　やソーしずぬ　みゅーぷき	百神の　八十神の　お蔭で
6. たきたきん　もいもいん　うらまい	嶽嶽に　杜杜に　居られる
7. あさかたぬ　うやかたぬ　みゅーぷき	父方の　親方の　お蔭で
8. まかにしどぅ　とぅゆんぶす　とぅゆみゃゆー	真金勢頭　鳴響む大按司　鳴響みゃを
9. くーしどぅや　ばがだふや　うまらしゅー	クー勢頭を　吾が匠を　生まらしている
10. ぱかからジ　てぃなとぅい　ならしゅー	若髪を　手にとって＜きれいに＞整えて
11. まいからジ　てぃなとぅい　ならしゅー	前髪を　手にとって＜きれいに＞整えて
12. まいからや　うしロんかい　さすとぅみ	前からは　後に　挿し留め
13. うしロから　まいんかい　さすとぅみ	後から　前に　挿し留め
14. まいぬぱま　ふなむとぅん　ぴゃりンみゃい	前の浜　船元に　走って行って
15. ふなつきや　みすつきん　ぴゃりンみゃい	船着けは　御巣＜船＞着けに　走って行って
16. てぃんまがま　さぱにかま　うしうロし	伝馬船　サバニ　押し下して
17. ふにがまや　みすーがまや　うしうるし	小舟を　小舟を　押し下して
18. すまずばず　ばすむとぅん　ぴゃりンみゃい	島尻若按司　わが島元に　走って行って
19. ふなつきや　みすーつきや　にうさゆー	船着けは　船着けは　遅いと
20. うぷかきや　かうかきや　にうさゆー	錨下しは　錨下しは　遅いと
21. むとぅぷやーぬ　ぶざさしゅーが　まいぬーり	元大家の　伯父主の　前に上がり

22. きじゅるやーぬ　ゆからずが　まいぬーり　　木造り家の　良かる人の　前に上がり
23. ぶざさしゅーが　ゆからずや　やーうんむー　　伯父主の　良かる人は　家に居るか
24. ボざさしゅーが　やー　びゆん　くーしどぅ　　伯父主は　家に座っているよ　クー勢頭
25. ゆからずや　やー　びゅん　ばがだふ　　良かる人は　家に座っているよ　吾が匠
26. なう　すでぃが　みゃーたイが　コーしどぅ　　何をしようと　参られたか　クー勢頭
27. いきゃ　すでぃか　みゃーたイが　ばがだふ　　いかがしようと　参られたか　吾が匠
28. やいまたび　シむぬたび　シーでぃやれー　　八重山旅　下の旅　しようとしているので
29. ふなコーさし　ぬりゃくさし　ふぃさまてぃ　　船子佐司　乗り子佐司　下さい
30. ふなくーゆば　うわどぅさす　コーしどぅ　　船子は　あなたが佐司　クー勢頭
31. ぬりゃくば　うわどぅさす　ばかだふ　　乗り子は　あなたが佐司　吾が匠
32. あんしちゃーん　うりしちゃーん　すてぃがゆー　　あのようにさえこのようにさえしてからね
33. うぷぴさら　うやずまん　ぴゃーりンみゃい　　大平良　親島に　走って参られ
34. うぷっウぁ　うぷあさきん　ぴゃーりンみゃい　　大番所　大役所に　走って参られて
35. うやうやとぅ　とぅぬとぅぬとぅ　かたらい　　親親と　殿殿と　語らい
36. うぷやいま　シむぬたび　シーでぃやれ　　八重山　下の旅　しようとしているので
37. ふなくーさし　ぬりゃくーさし　ふぃさまてぃ　　船子佐司　乗り子佐司　下さい
38. ふなくーゆば　っウぁどぅさす　くーしどぅ　　船子は　あなたが佐司　クー勢頭
39. ぬりゃくゆば　っウぁどぅさす　ばかだふ　　乗り子は　あなたが佐司　吾が匠
40. あんしちゃーん　うりしちゃーん　すてぃがゆー　　あのようにさえ　このようにさえしてから
41. はるみずの　ふなむとぅん　ぴゃーりみやい　　漲水の　船元に　走って参られて
42. ふなつきや　みすつきん　かにうるし　　船着けは　船着けに　錨を下ろし
43. まいぬあーら　くみノあら　ぬずにゃーん　　米の籾　米の籾を　望んでいる
44. ぬずぬずん　ばつばつん　ゆーいらび　　望み望みに　入念に　よく選んで
45. あらふにノ　あやみかず　シがーらし
新造船の　綾目ごと＜水漏れがないように＞きれいにして
46. きじゅーるやーノ　ずきみかず　シがーらし　　木造り船の　継目ごと　きれいにして
47. ういからや　すたんかい　さすとぅみぃ　　上から　下に　差し留め
48. すたからや　ういんかい　あぎさす　　下からは　上に　上げ差し
49. てぃんまがまや　さぱにがまや　うしうるし　　伝馬船を　小舟を　押し下ろして
50. ふにがまや　みシがまや　うしうるし　　小舟を　小舟を　押し下ろして
51. うぷかきや　かいかきや　にうさゆー　　錨下しは　錨下しは　遅いと
52. あらふにノ　きじロやーノ　つんにゃー　　新造船の　木造り船の　積荷は
53. まかれたま　たまぬシく　さらみよー　　マカレ玉　玉の底　もちろんそうだよ
54. まかりゃ　たまぬすく　ういから　　マカレは　玉の底　上からは
55. とぅまや　ぱい　んぬや　ぱい　かうしゆー　　苫を張り　布を張り　被せて
56. とぅまや　うい　んぬや　うい　ういから　　苫の上　布の上　上から

57. うやかぱら　しゆーかぱら　かうしゆー　親の原　主の原　被せて
58. ういからや　すたんかい　かきとみー　＜縄を＞上からは　下に　かき留め
59. すたからや　ういんかい　かきとみー　下からは　上に　かき留め
60. かてぃぱ　まて　ういぱ　まてぃしゅーりぱゆー　風を待って　追い風を待っていると
61. とぅらぬぱぬ　かじむとぅぬ　まかてぃゆー　寅の方角の　風元の　真風がねー
62. みうるみーや　ぱきゃきみーや　たずたず　風が吹く間は風が凪ぐ間はそれに合せて
63. あらふにノ　とぅむノポーや　オしゃたてぃ　新造船の　艫の帆は　押し立てて
64. きじロやーノ　たらいぷーや　オしゃたてぃ　木造り船の　大きな袋帆は　押し立てて
65. ゆーぴとぅゆーば　ゆかたゆーば　ゆばこみ　夜一夜を　夜片夜をば　夜を込め
66. ヨかたゆーば　ヨーぴとヨーや　ゆばこみ　夜片夜を　夜一夜を　夜を込めて
67. ふなつきや　かいかきや　にうさゆー　船着けは　錨下しは　遅いと
68. オぷかきや　かいかきや　にうさゆー　錨下しは　錨下しは　遅いと
69. うぷやいま　いしがきん　ぴゃりンみゃい　大八重山　石垣に　走って参られて
70. うやうやとぅ　とぅぬとぅとぅ　かたらい　親親と　殿殿と　語らい
71. コーしどぅや　なうノぷしゃ　みやたイが　クー勢頭は　何が欲しくて　参られたか
72. ばかたふや　いきゃぬぶしゃ　みゃーたイが　吾が匠は如何なるものが欲しくて参られたか
73. ゆすきぱら　きぬかにぬ　ぷしゃさみ　イスノキ柱　木の鉄＜鉄木＞が　欲しくてさ
74. なうぱしが　いけぱしが　かいみゃーてぃか　何をして　如何にして　買われるか
75. まかれたま　たまノそこ　さらみゆー　マカレ玉　玉の底　＜で買うの＞だよ
76. あんしやてぃがー　オりやてぃが　かいみゃてぃ　そのようにしてこのようにして買われて
77. ぬつぬつん　ばつばつん　ゆいいらび　望み望みに　入念に　よく選んで
78. あんしちゃーん　オりしちゃーん　すてぃかゆー　あのようにさえそのようにさえしてからは
79. ふなつきん　ふなむとぅん　オしうるし　船着けに　船元に　押し下ろして
80. ふなつきや　みシつきん　オしうるし　船着けは　御巣＜船＞着けに　押し下ろして
81. あらふにぬ　きじゅるやーぬ　つんにやー　新造船の　木造り船の　積荷は
82. ゆすきぱら　きノかにノ　さらみゆー　イスノキ柱　木の鉄の　＜木＞だよ
83. ゆすきぱら　きノかにノ　オいから　イスノキ柱　木の鉄の　上から
84. とぅまや　ぱい　んぬや　ぱい　かうしゆー　苫を張り　布を張り　被せてね
85. とぅまやオい　んぬやうい　オいから　苫は上　布は上　上から
86. オやかぱりゃ　しゅーかぱりゃ　かうしゆー　親の原は　主の原は　被せてね
87. オいからや　すたんかい　かきとぅみ　＜縄を＞上からは　下に　掛け留め
88. すたからや　ういんかい　かきとぅみ　＜縄を＞下からは　上に　掛け留め
89. かてぃぱ　まてぃ　ういぱ　まてぃ　しゅーりぱゆー　風を待って　追い風を待っていると
90. んまノぱノ　ぴつぬぱノ　まかてぃゆー　午の方角の　羊の方角の　真風がねー
91. みうるみーや　ぱきやきみーや　たつたつ　風が吹く間は風が凪ぐ間はそれにあわせて
92. あらふにぬ　とぅむノぷーや　オしゃたてぃ　新造船の　艫の帆を　押し立てて

93. きじゅロやーぬ　たらいぷーや　うしゃたてぃ　木造り船の　大きな袋帆を　押し立てて
94. ゆーぴとぅゆーば　ゆかたゆーば　ゆばこみ　夜一夜を　夜片夜を　夜を込めて
95. ゆかたゆーば　ゆーぴとぅゆーば　ゆばこみ　夜片夜を　夜一夜を　込めて
96. はるみずぬ　ふなむとぅん　ぴゃりンみゃい　漲水の　船元に　走って参られて
97. ふなつきや　みすつきや　にうさゆー　船着けは　御巣<船>着けは　遅いと
98. オぷっウぁ　うぷあさきん　ぴゃーりンみゃい　大番所　大役所に　走って参られて
99. うやうやとぅ　とぅぬとぅぬとぅ　かたらい　親親と　殿殿と　語らい
100. うんからとぅ　くーしどぅや　とぅゆんたい　それからぞ　クー勢頭は　鳴響んだ
101. うんからとぅ　ばかだふーや　なとぅたー　そらからぞ　吾が匠は　名を取った

三、解釈

１節から９節まではクー勢頭を登場させる前置きの部分である。10節から99節まではクー勢頭が何をしたか、その行状、業績を謡っている。100．101節は、偉大な事業を成し遂げた結果クー勢頭は名声を上げた、と讃えて纏めた部分である。宮古の神歌に良く見られる歌謡の形式である。

１．にたてぃぴーの　ぱずみぴーの　みゅーぷき　根立て部の　始め部の　お蔭で
　あしぱとぅ　ゆうます　<以下省略>　そうすれば　世（豊穣）は増す

「にたてぃぴー」は「ぱずみぴー」に同じく、根を立てた部、すなわち始めた部であろう。「部」は、その集団を指す。「ぶばま（伯母・叔母）び」「ぶざさ（伯父・叔父）び」）の「び（部）」に同じである。

なにを始めたのであろうか、というと、この祭事を始めたということになろう。狩俣の「大城元のピャーシ」の「一　にだでぃぬシ　ぱジみぬシ　なやぎゃーえ（根立て主　始め主を　崇べよう<名を揚げよう>）」や、ほぼ同じ詞章の「志立て元のピャーシ」「仲間元のピャーシ」「仲嶺元のピャーシ」にも共通する発想である（外間守善　筆者『南島歌謡大成Ⅲ宮古篇』1978年角川書店参照。以下『宮古篇』と略する）。これから執り行う祭事が恙無く行なえるように、創始した神々に祈願していくのが、ひとつのパターンである。このことから考えると、ここでも「うふぷなか」を創始した部は、祖先紳と考えてもいいのではないか。

「みゅーぷき」は、おかげで、という意味である。狩俣などの神歌に頻出する「みよぷぎ」で、「御世寿ぐ」であろう。『ウプシ』では、「みいうぷき」となっているが、表記違い。「み」は接頭敬称辞で「御」で、「よ」は「豊穣」で、豊穣を寿ぐの意味を含みつつ、お蔭で、という意味まで発展している。

「あしぱとぅ　ゆーまシ」は、「あシ（する）」の已然形に、既定条件の接続詞「ぱ」が接続した形で、「そうするのだから、（現在も豊穣に恵まれていますが、このように神々を崇べ神事を行っていますので）、豊穣はますます増す」ということになろう。祭りを始めた多くの方々・祖先神のお蔭で、このように祭事を行ない、クー勢頭を讃える神歌

を謡うことができます。だからますます豊かになるでしょう、ということである。

2．なかぴかン　うぷゆーぬシ　みゅーぷき　　中辺の神　大世主　お蔭で

「なかぴ」は、豊穣を下さる神「うぷゆーぬシ」のおいでになる中天のことか。上天でなく、人間界をいつも見守ることができる中の天ということだろう。「北谷まうしぎやねが歌声うち出せば　なかべ飛ぶ鳥も　よどで聞きゆさ」（島袋盛敏・翁長俊郎『標音評釈　琉歌全集』ｐ158）の「なかべ」であろう。

3. にぴぬかン　たとぅくるが　みゅーぷぎ

「にぴ」は、神のいます御嶽・イベである。「たとぅくる」は、4.で謡われている「ンまてぃだ　うやてぃだ」の母なる神、親なる神の二神のこと。「てぃだ」は神様という意味の接尾敬称辞である。

5．「ももかンぬ　やソーしずぬ」の「もも」は、百で多くの、「やソー」も八十で多くのという意味である。「しず」は神との対語で神のこと。たくさんの神々ということ。その後にも（あしぱとぅ　ゆーまシ）の省略記号「〃」が付いている。それにもかかわらず、『ウプシでは』次の、「たきたきん　もいもいん　うらまい（嶽嶽に　杜杜に　居ら れる）」の後に、「あしぱとぅ　ゆーまシ」の囃し部分の文字を記している。5.の部分に囃しが二ヶ所に存在するという変則的な通し番号になっている。伊佐さんが慎重に指摘するとおり記録者の単純な書き忘れではないかと推察される。したがって、5.と6.に分ける。

7．「あさかたぬ　うやかたぬ」の「あさ」「うや」は、父や族長、村長（オサ）をさす。その父親・親方のお蔭で、立派なクー勢頭・吾の匠が誕生した、と出自を明らかにして、物語の主人公の登場となるのである。

8．「まかにしどぅ　とぅゆんぶす」の「ま」は接頭美称辞の「真」、「かに」は立派な、愛しいの意の接辞、「しどぅ」は仲屋金勢頭豊見親の「勢頭」であろう。「とぅゆんぶす」は、「とぅゆんうぷあず」の約まった形で、名高い大按司の意味である。

9．「くーしどぅや　ばがだふや　うまらしゅー（クー勢頭を　吾が匠を　生まらしている）」の「くーしどぅ」は、24・26・30・38・71・100節に記載されているこの歌謡の主人公である。この対語として用いられる「ばかたふ」72節、「ばかだふ」31・39・101節、「ばがだふ」も9・25・27節とみられる。「ばが」は、「吾が」であり、「だふ」は、意味的にはツノサラも作れる「たくみ（匠）」であろうか。

１節から９節まではクー勢頭を登場させる前置きの部分である。

以下10節から99節まではクー勢頭が何をしたか、その行状、業績を謡っている。

10. 「ぱかからジ　てぃなとぅい　ならしゅー」11. 「まいからジ　てぃなとぅい　ならしゅー」の「からジ」は、「髪」である。それを「てぃな（手に）」「とぅい（取って）」「ならしゅー（整えて）」の意である。「まい（前）」の対語の「ぱか」であるので、若々しくはつらつとした青年の髪を讃えた「若髪」の「若」であろう。出かける前の身だしなみとして、髪を整えていることを10. 11. 12. 13. では謡っているのである。

14. 15. 16. 17. では、「てぃんまがま　さぱにかま」「ふにがま　みすーがま」を下ろして、

目的地に行くのである。接尾辞「がま」は、小さな舟という意味であり、ここではけっしてかわいい、の意味ではない。

20. 51.「うぷかき」「かうかき」は、錨をかけること、錨を下ろすこと、を意味する、と伊佐は指摘。19.「ふなつきや　みすーつきや　にうさゆー」と対になっていることからも肯ける。

23. 島尻若按司、吾が島元（クー勢頭の島元）の元大家を訪ねて行くのである。18.「すまむとぅ（島元）」であったのが、長い年月の間に訛ってしまって「すむとぅ」になったものであろう。「大神は母親で、その娘が島尻である」、という伝承から考えていくと、祭祀の発生・繋がりを言っているとも思われる。「ばがシまむとぅ」であるならば、クー勢頭の母親か先祖のいずれかの島元であったのであろう。『ウプシ』60頁にウヤガンに参加する神女たちを図式化している。「大神の女性」に対して、「スパヌウヤガン」（傍らの祖神）として、「トモウマ（二人）　島尻のウヤガン（数人）　島から出た女性」と記している。大神の秘祭に他所の集落の神女が参加するということからみても、島尻村との関係が深かったことの証である。

24. 25. 26. 27. で訪ねていった訳を話すのである。28. 29. で八重山旅をするので、船を操る船子を＜かして＞ください、と支援をお願いするのであるが、30. 31.「船子は、あなただよ佐司、クー勢頭」と、体よく断られるのである。しょうがないので、宮古の大番所・役所にお願いをしに行くのであるが、同じように断られる。それが、謡われている部分が33. から39. までである。そこで漲水の船元の港に舟を着け、米の籾やマカレ玉をアラフニ(新造船)に積むのである。ここが島尻の場合と違うところである。この米や籾、さらにマカレ玉、アラフニ（新造船）まで、宮古の大役所から提供されたものであるか、はっきり謡われていない。が、船子を出さない代わりに、なんらかの便宜をはかったことが推察できる。水漏れがないように舟を整備してから八重山に着いたということが、41. から69. までには謡われている。そして無事宮古にもどったことを、98. 99. で大役所に報告していることからも推測できる。

45. 船旅に耐えられるように船を整備したことを謡っていると、伊佐は説く。「あやみ」は、「綾目」であるが、ここでは46.「ずきみ」と同じく、舟の接合目を指しているのではないか。『宮古篇』67頁「仲嶺元の世乞いのピャーシ＜女＞（狩俣）」に、

227ジなみどぅんま　　地並み殿＜種子を降ろして下さる神＞は
228うらシなみどぅんま　　降ろす殿＜種子を降ろして下さる神＞は
229あやみにやだ　ふぃーば　誤りなく（豊作を）くれるから
230ビみにやだ　ふぃーば　　間違いなく（豊作を）くれるから

とある。同書の「年のバンのピャーシ（狩俣）」「祝いのウプナーのピャーシ（狩俣）」「大世鎮めのピャーシ＜女＞（狩俣）」にも同じような詞章がある。「あやみ」は綾目、「ビみ」は苧目で、織物の隙間を綾なる目、苧の目と、美しく表現している。が、「綾目もなく、苧目もなく」、隙間なくということで、間違いなく、という意味まで転じている。ここでも、

船板の継目をこのように表現したのであろう。

55. 57. 84. 86.「かうしゆー」は、苫を張り、布を張り「被せて」の意味で、「くーしどぅ(クー勢頭)」の異表記ではない、とのこと。狩俣方言にも「かっヴぃイ（被る。布を掛ける)」がある。舟の荷物が濡れないように、雨や波が舟に入らないように、苫や布を被せることを指すようである。

58. 59.「かきとみー（かけ留め)」るのは、「縄」であり、苫や布を被せ、それが風でも飛ばないように縄で固定するのである。

60.「かてぱまて　ういぱまてぃ　しゅりばゆう」は、「かてぃぱ　まて　ういぱ　まてぃ　しゅーりばゆー（風を待って　追い風を待っているから)」である、と、指摘する。単語や文節の切り方、その表記法に問題があった。また63. 64.「うしあたてぃ（押し当たって)」ではなく、「うしやたてぃ（押し立てて)」である、と、伊佐さんは指摘する。

77.「ぬつぬつん　ばつばつん」は、入念に、慎重に、親密に、という意味であり、「ゆいいらび（良く選んで)」に結ばれる。

70. から99では、八重山の支配者である親親と話をし、ユスキ（イスノキ）柱・木の鉄（クロキ）を手に入れたいので来たという目的や、交換物資はマカレ玉だといって、交渉が成立するのである。マカレ玉は宝玉か、それに匹敵する玉石であっただろう。そして、ユスキ柱・木の鉄を積み、夜一夜、夜片夜で宮古に着き、宮古の役所に報告をしたことが謡われている。

100. 101節では、偉大な事業を成し遂げた結果クー勢頭は名声を上げた、と讃え、纏めた部分である。

前掲『ウプシ』では、このアークの後に、

一時間半ほどかかる歌である。内容は、カフカ（屋号）の祖先が大神島から出発して八重山に船旅をし、ツヌサラを造る黒木をとって無事に宮古の漲水港まで来た。大神島まで黒木を持ってこられた。そしてツヌサラを造ったというものである。これを称えた歌であり、後にトヨメと呼ばれたという。

があり、訳をつけるに手がかりになった。が、「そしてツヌサラを造った」とも「後にトヨメと呼ばれたという」とあるが、アークには、謡われていない。

81. あらふにぬ　きじゅるやーの　つんにやー　　新造船の　木造りの　積荷は

82. ゆすきぱら　きぬかにぬ　さらみゆー　　ユスキ柱　木の鉄の　＜木＞だよ

と謡われているだけである。また、「後にトヨメと呼ばれたという」ことも謡われていない。

100. うんからとぅ　くーしどぅや　とぅゆんたい　それからぞ　クー勢頭　鳴響んだ

101. うんからと　ばかだふーや　なとぅたー　　そらからぞ　吾が匠は　名を取った

ただ「鳴響んだ」「名を取った」と謡われているだけである。

四、まとめ

これに類似した歌謡として、狩俣の「とぅゆん　ゆまさイ（鳴響む世勝り）」「頂の磯金のタービ」「磯殿のフサ」や多良間の「かでかりのニィリ（すつうぷなかのニル）」を挙げることができる。詳細については、『宮古篇』に譲るとして、ここでは、その内容を略述すると、以下のようになる。

(一)「とぅゆん　ゆまさイ（鳴響む世勝り）」のニーリは、

大城真玉の次男ユマサズ（世勝り）が成長して、パギンミ（地名、「禿嶺」の意）に屋敷を構えるような人物になった頃、仲宗根豊見親の役人招集（親寄り合い）があり、そこで「造船担当の役人になりなさい」と命令された。そこでユマサズは、船に貢ぎ物の布・かし糸を積んで、漲水港から八重山に出かけた。地元の役人に新しい木造船の建造を頼むと、おみやげに何を持ってきたかと訊く。そこで、宮古製の布や糸をたくさん積んできたと答えると、商談は成立。船材を切り出し多くの大工を集めて、立派な船を造り上げた。その船に今度は八重山製の布や糸かせをいっぱい積んで宮古の港に戻ってきた。仲宗根豊見親は自分の子供のようにユマサズを迎え、その船で首里王への貢ぎ物を乗せ、那覇へ旅立たせた。王への捧げものが立派だったので、その褒美として一人残らず下賜品をいただいた。こうした由来があるからユマサズの子孫は今も立派に栄えているのであろう――と謡っている。

（筆者『宮古の歌謡』（2003年　沖縄タイムス社））

仲宗根豊見親に、「造船担当の役人」に任命され、八重山に行く→造船が目的。交易。船材の交換物資として布・糸かせ→船の完成、八重山の糸・糸かせを積み宮古に帰る→仲宗根豊見親に賞賛され首里への貢ぎ物を運ぶ→王から下賜品を拝領→ユマサズの子孫の繁栄

と謡われている。造船担当の役人に任命された世勝りの船は、それに相応しく大きかった。船子もついている船である。旅の目的が造船であり、交換・交易物資も沢山積んで八重山に旅立つのである。クー勢頭の旅立ちとの違いは、世勝りの公的な場合と私的な違いにみられる。

(二)「頂の磯金のタービ」は、

頂の磯金は、根の島・元の島で子孫の皆が鉄の箆がなく、素手で農業などをしているので、それを見かねて、大大和（日本本土）に上っていったようである。大大和の人と話し合いをして鉄を船いっぱい手に入れることができ、それを持ち帰って狩俣部落の南方マフキャーの地の真中に鍛冶屋を建て、鍛冶を始めたらしいが、北風の吹く冬の三ヵ月間、その地は風を防ぐ山もなく吹きさらしである。それを見た母の神鳴響み親は、大変気の毒に思い、上原の自分の土地の真中に鍛冶屋を立てさせ、そこで鍛冶を始めさせたという。狩俣部落をはじめ、宮古中の男たちにそれを広げていった、と謡っている。（前

掲『宮古の歌謡』）

行き先が大大和→（旅の目的）あオかに・ふがにを手に入れること→話し合いで手に入れる→狩俣のマフキャーに鍛冶屋を建て鍛冶を始める→上原に鍛冶屋を移転。鍛冶再開。→狩俣はじめ宮古中に鉄の箆・農具を普及。

（三）「磯殿のフサ」は、

磯殿は、自分の船の板倉（板を重ねて拵えた船か）を出し、さらに船子も選んで雇い伊良部島に行くのである。

磯殿が添え下女を欲しくて伊良部島佐良浜に渡ったという事であり、その引き替えのお土産は青玉・火玉であるという。それが具体的に何を指すかは不明である。翡翠と赤いルビーともとれるし、自分の逸物（ぴィぐる･性器）がお土産だと、豪放な磯殿はいったかもしれない。（前掲『宮古の歌謡』）

添い下女（側室）を求めて伊良部島に→交換物資として青玉・火玉→下女を連れ帰る→下女男子出産→下女が家の実権を握り、本妻の追い出しにかかる。

という筋である。

（四）「かでかるのニィリ」は、

旧暦5，6月中壬辰の日に行なわれる「すつうぷなか」の祭祀で謡われる。嘉手苅の親が主人公である。親は、荒地を均して、大きな屋敷、大きな家を建築。お祝いのお酒も不足ないのだが、ただ足りないのは鼓であった。そこで鼓の材料を求めて伊良部島に渡ると直ぐ友達の家に案内されて祝い酒で歓待され、鼓材を買って船に積みこんで、嘉手苅に運び鼓を拵えたという。「一撞木打てば島全体に轟き、二撞木打てば国全体揺れ動き、嘉手苅の親はますます名声を上げた。」という。これも神様のお蔭であると感謝の気持ちを謡い締め括っている。

嘉手苅の親が主人公→多良間島から鼓の材料を求めて伊良部島に渡る→（交換物資・お土産のことは何も謡われていない）→嘉手苅の親は直ぐ友達の家に案内されて祝い酒で歓待→鼓材を買い船に積みこむ→島に帰り鼓を造る→鼓を一撞木打つと島全体が轟く、二撞木打つと国全体が揺れ動く→嘉手苅の親は名声を上げた。

（一）（二）（三）（四）の歌謡と比べてみると、（二）（三）（四）の歌謡の主人公は、前記したように私的な旅であり、旅先が伊良部、大大和である。（一）は八重山旅であり、クー勢頭の旅と同じである。が、前者が仲宗根豊見親の庇護の下による公的な旅であり、クー勢頭の私的な旅とは違う。そのため十分な庇護を受けていないようである。船の大きさ、旅を手伝う船子の有無などがそれを語っている。

ゆなうす（角皿）は、五合ほど入る椀に左右の手で持つようにできた容器である。それは村の宝物であり、それを所有することは村の大きな誇りであった。他の村から一段と抜

きん出ていると評されたに違いない。固い黒木やユス木でできた立派なゆなうす（角皿）を保有し、祭事を行ないたい、と切望したクー勢頭は、船旅を手伝う船子の支援もなく、ただ帆を張り、風にまかせ、櫂を操る旅をして目的を達成したのである。命がけで八重山に赴き、マカレ玉という宝玉・玉石と交換して材料を手に入れ、命がけで戻ってきたのである。クー勢頭の並々ならぬ決意が込められていた、と推測される。その材料で村の宝物であるゆなうす（角皿）を拵えて神事を行なう。祖神に対して最高の礼を尽くしたことになる。祭事が行われるたびにクー勢頭の偉業が、誇らしく蘇って来たに違いない。

それ故に、クー勢頭の偉業を顧みたとき、軽々しく名前を口にすることはできなかった。遠い祖先神でなく、身近な祖先神として畏敬の念で祀られていたに違いない。この偉業を称え、密かに神事で伝えられてきたのがこの神歌である、といえよう。

＜付記・・・結びにかえて＞

『ウプシ』を贈って下された狩俣出身の赤松千恵美さん、伊佐さんをご紹介くだされた在沖狩俣郷友会元会長狩俣幸男さん・仲宗根義夫さん、そして島のこの歌謡の伝承者伊佐照雄さんに、心からお礼申し上げたい。長い間、私にとって幻であった大神島の神歌、これに接することができ、島が少しだけ見えるようになった。

（2017年 9 月25日）